

わたしたちの人権

257

誰もが人間として生きていくうえで
侵すことのできない当然の権利
これが『人権』です

人権作文の紹介(令和7年度)

今月は、清和中学校一年田中陽彩
さんと蘇陽中学校一年松本若奈さん
の作文をご紹介します。

人権学習を通して

清和中学校 田中陽彩

私は、この六年間、そして今年の人権学習をとおして「差別のおかしさ」「人は一人ひとりがちがうこと」を学びました。これから一人ひとりには生まれながらにもっと幸せになる権利があることを忘れずに生きていくことの大切さを深く考えてみました。

私にはパーキンソン病のおばあちゃんがいきました。私の記憶の中の最初のおばあちゃんは、一人で歩くことができなくなっているおばあちゃんでした。バランスが取れずに転んでいる姿を何度も見ました。身体がどんどん動かなくなっても自分のしたいことができなくなっても

いるところ、病気の進行で指がまきこんでしまっているところなど、病氣と闘うおばあちゃんをたくさん見ました。

この話は差別とは少しちがうのかもしれませんが、私は今とても反省しているし、後悔しています。入院し、薬を点滴するうちに幻覚を見るようになったおばあちゃん。泣きながら「なんで分らないの、そこにいるじゃん。」と怒ることもありました。そんなおばあちゃんを見ているうちに、おばあちゃんに会うのが怖くなっている自分がありました。どんどん病氣が進行していくのを見るのはつらかったけど、怖くもありました。しかし、おばあちゃんが亡くなった今、後悔の思いが強く残っています。「なんでおばあちゃんにもっと向き合ってあげられなかったのだろう。最後まで病氣と闘ってくれたのに、孫の心配をしてくれたのに、なんで逃げてしまったのだろう。」とたくさんのおばあちゃんの思い出がふれます。た

くさんのことを教えてくれ、たくさんのお優しいさをくれたのに、もう直接おばあちゃんに恩返しすることはできません。

ある小説の中で『恩送り』という言葉に出会いました。この言葉は「恩返しをすることができなくても、その人からもらった言葉や教え、そして優しさをその人と同じように他の人につないでいく」ということを意味しているそうです。おばあちゃんのことを差別してしまっていたのかもしれないことを反省し、『恩送り』をしなければと強く思うようになりました。最後まで大好きな食べることをあきらめず、最後まで幸せに生きる権利を全うしたおばあちゃん。そんなおばあちゃんを見習って目一杯幸せに生きて、人に優しく、人を大切に、一人ひとりと真剣に向き合っていきたいです。

人権学習を通して

蘇陽中学校 松本若奈

私は、「話したいと思うようになりました」を学習して、小学校でも習った水俣病について、また考えることができました。「水俣病は、感染する病氣」という決めつけから、水俣病になった方々への差別がおこりました。水俣病は決して感染する病氣ではないのに、水俣病の患者さ

んやその親族などにも、差別し、みんな、さけていきました。私がこの立場だったら、とてもつらいと思います。でもこんな中で、すみれのお母さんは、五百人もの前で、過去のことを話すというすごい決断をしていて、すごいなと思いました。思い出すだけでもつらいはずなのに、そのような決断ができてすごいと思いました。私も、すみれのお母さんのような、勇気のある人になりたいと思いました。今の自分は、友達に對してきつい言葉を言ってしまったと思います。「ノリ」のように言ってしまった。本当はきずついているけど、本当の課題点としても、口が悪いところや注意を聞かないところがあるの、私も課題点に気を付けて、「ノリ」のように動かされず、傷つく言葉を友達に對して言わないようにしたいと思いました。相手の立場になつて考えるということを注意深く気をつけていこうと思いました。そして、友達が言っていたら、きちんと注意して、すみれのお母さんのように勇気のある人になりたいと思いました。今の生活を見直して、今後に生かしていこうと思いました。

自分の人権を守り
他人の人権を守る
責任ある行動を



©2010 熊本県くまモン